

「つばき」のこと…(2)

修復建技術コンサルタント 守屋資郎

(3) 古文書の中では

古いといっても、全国的に有名になった青森の山内丸山遺跡からの花粉分析ではツバキ属のデータはでてきておりませんので、古代の生活の係わりは分かりません。しかし、その後の日本の生活史には文献を通じて、たびたび出現します。その一端を見てみましょう。

「古事記（西暦712年）」には仁徳天皇、雄略天皇の皇后の作として2首の歌があります。いずれも、「つばき」の葉が照り輝いて、花も美しい情景を天皇への誉め敬う言葉として歌いあげられています。

「日本書記（西暦720年）」には景行天皇が豊後の国で土蜘蛛を討伐したときに「つばき」で作った武器を用いたとあります。堅牢な材質を利用したものでしょうがどんな武器だったのでしょうか。また、推古天皇が「つばき市の街区に唐客を迎えた」という記事があり、当時、「つばき」が重要な産物となっていたことを示しています。この産物のことは「出雲風土記（西暦733）」

にも載っています。

「つばき」の産物が何であったかについては、「続日本紀（西暦797）」に記されていますが、つばき油であつたらしい。この油は777年にいまの中国東北部の沿海州にあった渤海国に献上したとあり、最高品質のものであつたらしく思われます。しかし、平安時代になるとゴマ、麻、エゴマの油がでてきますので、相対的には価値が下落してきます。

突然ですが、「万葉集」の歌人は自然を愛し、堪能したことは知られていますが、松田さんという植物研究者によりますと作品にでてくる植物は約160種にも上るそうです。ちなみに、「古今和歌集」では75種だそうです。ところで、「万葉集」の中で、多く詠まれたのは萩、梅、橘がベスト3で桜は5位、藤は7位、「つばき」はつつじに次いで13位にランクされています。なかなかの健闘ぶりだと思います。なお、「万葉集」は全部で4,496首あるわけですが、その1/3が植物に関するものといわれていま

す。

「万葉集」の「つばき」を詠んだもので、気に入っているものを2首、ご紹介しておきましょう。

先ず、「つばき」市の盛況ぶりとそこに集まってくる、気になる女性のおもかげを伝えるものですが、ツバキの灰が媒染剤として使用されていたことを伝えるものとして、

紫は灰指すものそ

海石榴市の八十の懼ちまたに

逢へる児こや誰

それから、「つばき」の花柄が“ぼてっ”と落ちる様を詠んだもので、

わがかど門かたやまの片山椿

まこと汝なれわが手触れふれなな

土に落ちもかも

そのほかにも、大伴家持の長歌等が情感豊かに、山野の、庭の「つばき」を歌っています。

(4) 地名考

どんな地名も由来があって、歴史の凝縮です。我々のような地質を商売にしているものは、調査地に出向くと、その地誌や歴史が気になりますし、時に、仕事の情報となることもあります。特に、災害に関して

は地名が規模や性状等を示唆してくれることもあって無視できません。

青森県の三戸郡に「崩くずれ」という集落があります。災害地質の調査をする人なら、興味が湧くと思います。むかし、この集落の点検調査をすることになって、地形図を見ますと確かに周辺とは異なる等高線の不明瞭な不整形地をしていました。期待しつつ、現地にいってみると、「崩」は災害履歴地を意味するものではなく、天皇の崩御に関連するもので、御陵があるとかいう言い伝えの場所だったということもありました。がっかりしたものの、それはそれで安心した記憶があります。

ところで、「つばき」という字をもつ地名はどんな意味があるのでしょうか。「日本方言辞典」によると、「つばえる」=たわむれる（主に西日本）というのがあって、暴れるの意に共通とあります。このことから、ツバまたはツバキ地名のところは土地がツバエルところですので、崩壊、地すべり地の可能性があり、崖地である可能性もあるわけです。もっともツバ、ツバキ地名の由来には諸説があって、いくつかご紹介しますと、

① つばき科の植物の自生地、椿島などはその例でしょう。

- ② ツバエル語源で、ズバリ崩壊地形である場所。
- ③ 帽子のツバ説で地形の端部、押し詰まった場所。
- ④ 水につかるところという方言説。河岸の水害常襲地帯。
- ⑤ ツバはツボの転化語と考えると、窪地ということになります。

実際には存在する地名としては椿山、椿、椿川、椿台、津梅、津波敷、鋳市とかがありますが、この内、東北地方には下記の地名が実在しています。

- 「椿」 秋田・男鹿市（海岸沿い）
- 「椿川」 秋田・東成瀬村（河川沿い）
秋田・雄和町（河川沿い）
- 「椿島」 岩手・陸前高田市（海岸）
宮城・志津川町（海岸）
- 「椿台」 秋田・八森町（海岸沿い）
- 「椿山」 青森・平内町
青森・深浦町
- 「津梅」 青森・岩崎村

(5) 植生の復元に関連して

大層なテーマで恐縮ですが、近年は地球規模から身近な環境まで、環境に対する人々の関心が高まっています。建設事業においても、生態系になじむ計画、施工が望

まれています。そこで、移植による貴重種の保存（植物のミテイゲーション）について、事例をご紹介します。それは、岩手県胆沢ダムにおける天然記念物ユキツバキの移植、再植の事です。このダムのロック採取地である猿岩地区は右岸にそびえる石英安山岩の岩山ですが、ここにユキツバキが成育しています。このユキツバキは分布上でもたいへん貴重なのですが、加えて、地元の神事には欠かせないものだそうです。そこで、工事中一時、移植して、ロック採取後跡地に再植（本移植）して、もとの群生地にするという経緯があります。

そこで、このユキツバキについて、少々、お話します。ユキツバキは、普通に見られるヤブツバキと形態的に差異があります。その中で、誰でも分かる違いはユキツバキは枝がしなやかで折れにくく、葉にギザギザがあって、葉脈がはっきりしていることです。そして、ユキツバキは雪国だけに分布していて、残雪のそばで花が開き、種子が少なくて実生がほとんどないことです。

分類学的にはヤブツバキの亜種、変種であるとの説がありますが、はっきりと棲み分けています。なお、両者の間には中間的な性質をもつユキバダツバキというのもあります。

棲み分けているのは、ユキツバキは雪と霜と密接な関係を持ち、特定の気象条件が満たされた地域にだけ成育するからといわれています。

話を元に戻して、胆沢のユキツバキは昭和44年に岩手県の「猿岩ユキツバキ群落」に指定され、栗駒国立公園の第2種特別区域ともなっています。

なぜ、このユキツバキが貴重なのかは、下の分布図を見ていただければわかりますが、分布域の中でも、太平洋側に分布することと、北限になっていることなのです。

つまり、ユキツバキは非常に狭い区域にひっそりと棲む「雪国椿」というわけですが、その中でも、胆沢地区は健気にも北限地で耐えているのです。



(ヤブツバキとユキツバキの分布)



- 左上 参平椿 桃紅地に紅の縦絞りと白覆輪が入る一重。
右上 曙 淡桃色の一重、やや大きめ。豊満な花姿。
左下 白侘介 白色の一重、猪口咲き、開炉茶花の代表。
右下 日暮 白～淡桃地に紅の縦絞り、八重で大輪。